

# 代参講のお仮屋

黒田 一 充

## 一 代参講

講はある目的のために結成された集団で、経済的な相互扶助のための講、娯楽や趣味の集まりのための講もあるが、もともと多くさまざまな種類があるのが信仰に関わる講である。

信仰に関わる講も、庚申講のようにある特定の日に当番の宿に集まって祭りや会食を行うような地域社会の中で完結するものと、地域社会から出て遠隔地の諸社寺を参詣する目的の講がある。参詣する諸社寺が近い距離の場合は総参りといって講員全体で参拝するが、遠隔地の場合は講の代表が参詣してお札などを受け取ってくることになる。これを代参講といい、京都市の愛宕講のように毎月交代で月参りをするところもあるが、多くは毎年か何年かおきに代表者数名が参詣するところが多い。各霊場によってその起源は異なるが、古くは社寺の側から神職・僧侶・修験者などが御師（伊勢はおんし、他はおし）や先達として地方を廻り、守り札や祈禱札、縁起物などを配っていた。それぞれの御師は担当の村を持ち、そこを檀那（旦那）場として毎年廻るようになっていった。

江戸時代になって街道が整備され、庶民が容易に旅をすることができるようになると、信者がみずからそれぞれの霊場に参詣するようになり、担当の御師が檀那場の信者を迎えて宿泊や参拝の便宜を図るようになる。しかし、交通の便が悪く費用も掛かることから、講を組織して費用を積み立て、毎年籤引きなどで代表（代参者・代参人）が選ばれて参詣し、講員全員の祈禱札を持ち帰って配るという代参の方式が現われた。代参者が出発する際と帰着時には、道中の安全と帰着を祝って儀礼を行い、持ち帰った祈禱札を、村でも毎年造り替える仮設の祠（お仮屋）でまつるところもあった。

そのお仮屋は、竹を柱に麦や稲藁、杉葉や檜葉で屋根や壁を葺いて造ったが、現在では材料の入手や技術伝承が困難になっているため、木製や石製の常設の祠に変わりつつある。かつて愛知県津島市の津島神社の代参講のお仮屋を紹介したが、<sup>①</sup>本稿では他の代参講の事例を見てみたい。

## 二 伊勢講のお飯屋

全国的に広く見られる代参講は、伊勢神宮に参詣する伊勢講である。中世には伊勢の御師<sup>おし</sup>が各地で布教活動をしてお札を配って廻ったが、江戸時代の中ごろになると、個人的に伊勢参りをする人も重なって多くの人が伊勢を目指した。

かつて訪ねた福岡県香春町の古宮八幡神社の祭りで、神輿渡御の際に唄われる音頭が地元の方には由来がわからなくなっていたが、実際に聴いてみると実は伊勢音頭であったことなど、各地の祭りに伊勢音頭が伝わっているのも、江戸時代以来の伊勢詣の影響である。

伊勢への代参は講員がお金を出しあつて交代で行くのだが、とくに男女を問わず、若者が年長者に引率されて出掛けるところも多かった。そういう村では、人生初めての旅の経験となる伊勢詣をすることで、村で一人前と見なされたという伝承を残すところも多い。初めての伊勢詣の若者がいた場合は帰って来る際に、村人たちが村境まで迎えにいくサカムカエを行い、下向祝いというお祝いが開かれた。

また、長崎県壱岐島の郷ノ浦での聞き取りでは、家を新築し、長男に嫁をもらつて隠居してから伊勢に出掛けるとのことで、伊勢参りは社会的地位を表す象徴となっていた。その際には、帰ってからドウブレイというお祝いを開くことになっていた。サカムカエやドウブレイの名前は地域で少しずつ異なるが、全国的に共通して行われた。

奈良県の『安堵町史』に、天明四年（一七八四）三月の「伊勢参宮道之記」が載っている。その中に、出発前の準備のところに次のような記

録がある。

一前日ニおはけ之儀極楽寺へ頼申度由申置、能時刻ニ使を遣し可申由申置候也、（中略）

一四月三日おはけつきたいし日柄よく候故今日持させ申候、人足儀兵衛、甚兵衛式人壱日ツ、二而出来かね少々手伝入申候、此賃壱人壱匁ツ、（中略）

一おはけ鳥井先年より調有之候、<sup>②</sup>

出発前の準備として「おはけつき」ということをした記事だが、「おはけ」とはどのような形態なのか、この記事からはよくわからない。

兵庫県の『加東郡誌』（現在の加東市・小野市）では、

講毎に「おはけ宿」と称する家を定め、参宮に関する集会所となし、門前に「おはけ様」とて、竹を立て七五三を張りたる神籬を作り、留守居のものは毎日此の処に來り、神宮を参拝す。<sup>③</sup>

とあり、南隣の『美囊郡誌』（三木市周辺）でも同様の記述がある。<sup>④</sup>

『新修加東郡誌』にはもう少し詳しく記されている。伊勢参りの一行の中には「はいの子（拝の子）」とよばれた十一、二歳の女子も参加して、伊勢に連れて行ったようだが、

「おはけ宿」（講の世話人）は、講衆がくじ引で決めた。「おはけ宿」にあたると、緑先に土を盛つて上に竹を二本さし、注連なわをはる。おはけは一行が帰ってくるまで、留守家族のものが灯明をあげて旅の安全を祈つた。<sup>⑤</sup>

とある。加東郡社町東古瀬の歴史などをまとめた『巨勢誌』にはさらに詳しく、

芝を1m四方にしきつめ、その縁には河原石を並べました。杭を四方にうち、中央に3m程度の竹を三枝のこして二本たて、それに御幣をくくりつけ、杭にしめ縄を張りわたすことができあがりです。おハケ元は旅の間毎朝御供をそなえ、参詣者の留守家族も毎朝おハケにおまいりました。<sup>⑥</sup>

と記されており、芝の上に竹二本を立て、その間に注連縄を渡したものであったようである。

一般的に、オハケは各地の神社の祭りで、神事の準備などを担当する当番の家（頭屋）に立てられることが多く、門口や庭に先端の枝葉を少し残した青竹を立て、一番上部に御幣を付けるものが多い。岡山県などでは、二階建ての家の屋根よりも高くしなければならぬとされるところもあり、頭屋の家の目印にもなる。そのため、竹を直立させるために下部に支えとする綱を張ったり、土壇を築いたり、木材を組んだ構造物を作るところもある。

神社祭祀のオハケに対し、交通の便がよくなって何日も徒歩で旅をするということがなくなっているため、伊勢講のオハケが現在も残っているところは、極めて少なくなっている。

兵庫県三田市下相野では、正月二日に御供搗きが行われる。翌日に行われる氏神の大歳神社おとしの祭り（オトウ喜び）の準備である。正月で静まりかえった地区を訪ねると、かすかに人声と餅を搗く音が聞こえ、それを頼りに近づいていくと、頭屋宅に男性たちが集まってお供え物など神事の準備をしていた。その際、庭にオハケが立てられる。

六〇センチメートル四方の赤土の土壇を三段築き、各段には芝を敷く。

中央には軒より少し高い約三メートルの竹を立てる。先端部は枝を残し、半紙を巻いた藁束を中央の枝に括りつけ、そこに御幣を立てる。四方の地面にも御幣を立てて注連を張る（写真1）。このような形のオハケは、三田市内の神社の祭りでもよく見るものである。

しかし、準備の間にお話をうかがっていると、このオハケと同じものを四年に一度、二月ごろに行われた伊勢講の代参の際に、大歳神社の境内に立てるのだという。ほかにも三田市内の井ノ草や大川瀬<sup>⑦</sup>、丹波篠山市今田町黒石でも、伊勢講の代参中に立てるオハケがあるという。<sup>⑧</sup>

大阪府能勢町宿野では、五年に一度行われた総詣りには、集落内の八つの地区でそれぞれ代参者とヤドが籤で選ばれ、「出発の前日、代参者とヤドの主人とでオハケサンをつくって床に飾」ったという<sup>⑨</sup>。ヤドは、代参者の道中の安全を祈る役割が課せられ、床の間にオハケサンをまつたのである。ところがこれは戦後の事例のようで、『能勢町史』では、



写真1 三田市下相野のオハケ（2007年）

所によってはその期間中「おはけ」を立て、講員家族が毎朝そこに参拝した。おはけは庭先の清浄な場所にスギ葉で囲いをして、神棚を作って伊勢神宮をまつたものである<sup>10)</sup>。

として、御幣を付けた竹を立てたものではなく、もっと大きな棚がある屋形が庭に造られたことを記し、写真を載せている。

戦前に各地のおはけを調査した原田敏明も伊勢参宮のおはけも紹介しており、かつては伊勢講の代参の無事を祈るためおはけが立てられた村が各地にあったことがわかる。その中で、能勢のおはけは床の間ではなく、庭先に青葉で造った宝殿を建ててまつるのだと記している<sup>11)</sup>。

また、近畿地方を中心に講の行事を調査した井上頼壽も、京都府綴喜郡の伊勢講の事例として、

綴喜郡三山木村山本では、参宮の道者が立つと同時に氏神の佐牙神社の境内入口に杉葉や杉皮、松丸太などで簡素な屋形を築き毎夜留守の講員の内、然るべき人が燈を上げて拝む。此をおはけさん又は飯屋と呼び一行が帰えるや直ぐ破壊した。<sup>12)</sup>

と記しているなど、屋形のかたちのものがあつたと記している。しかし、全国的にはおはけは竹を立てたもので、屋形のかたち、いわゆるお飯屋の形態は極めて少ないということを指摘しておきたい。

おはけを立てるのではなく、人間が入ることのできるもつと大型のお飯屋を造っていた地域もある。群馬県北部の赤城山麓では、伊勢参りにお飯屋を造り、代参者が帰ってくる際に儀礼があつたという。『北橋村誌』には、北橋村（現・渋川市北橋町）八崎での伝承を記している。

お伊勢詣りをするとお山づきの予定の日に留守宅では近くの空地

（多く田や畑の一隅）にオカリヤを作る。これは間口六尺位の竹の柱、竹の桁で藁葺の片屋根で、屋根の裏側は地面についている。中に人が入れる、刳がらを地面にしき、刳俵を一俵中央におく。竹の柄に藁製の軍配様の団扇や、藁製の徳利、半紙の横とじの大福帳などを置く。大福帳には登山銭別をかく。昔は個人毎に作つたが、団体とか講で伊勢詣りする時は共同で大形のオカリヤを作る。さて御詣りをすませて下山すると、このオカリヤで刳俵に腰かけて酒を一献くむ。そしてオカリヤに火をつける。燃えあがると各自の家に帰るのである。<sup>13)</sup>

間口六尺（一八〇センチメートル）の藁製のお飯屋を代参者の人数分だけ造つたようだが、前面は竹二本を柱にして桁を渡し、後方は地面に接した藁葺の片屋根で、中に人が入れる大きさのものであつた。内部の地面には刳殻を敷き、中央に刳俵と藁製の軍配様の団扇や徳利、大福帳なども置いたという。

同村の小室や箱田でも、同様の民俗があつたことが記されている。いずれも、代参者が旅行中にお飯屋を造り、代参者が無事に帰ると、種刳を入れた俵をお飯屋の中に置き、その上に代参者を座らせて、神酒を飲ませている最中に背後から火を付けてお飯屋を燃やしたようである。

群馬県内の市町村史の民俗編などにも同様の記事が見えるので、一覧表にまとめてみた（表1）。いずれも伊勢まで十四日前後から六十日ほどの日数をかけて伊勢参りをしたころの話で、明治から大正のころまでの伝承である。

共通して出発前か出発後に留守家族や講員たちがお飯屋を造り、代参



表1 群馬県内の伊勢講のお飯屋

出典（刊行年）	現在の市町村	記事
中之条町誌 (1993年)	中之条町	代参を送り出すと組の者がオクマンサンの鳥居の下にお飯屋（小祠）をつくった。代参の人数分のお飯屋には、毎日交代で道中の無事を祈るためにお参りし、無事に帰ってくると燃やしてきよめた（蟻川）。お飯屋をつくり、代参に行った人の名前と趣旨を書いた札を立てておいた。家によっては陰膳も供えた（大道、山田でも）。
勢多郡誌 (1958年)	渋川市	旧慣によれば講員は出発前にお飯屋を作り（お飯屋は竹の桂、藁葺の片側屋根の中に人の入れる程度の大きなもので、初俵、藁製の徳利、同じく団扇、帳簿などを備える）、氏神で御祓をうけその幣をこのお飯屋に立て、出発する。帰宅の時はお飯屋に入り、初俵に腰かけて神酒を祝う。この時お飯屋に火をつけて之を燃やす。
北橋村の民俗 (1968年) 北橋村誌 (1975年)	渋川市	出発後八日目をオヤマツキといい田圃か神社の境内に藁でお飯屋を作り、種俵を作り初をお供えた。帰るとまずお飯屋のところへ行き、これを背にご神酒を飲む、この時お飯屋に火を付けて焼く。これをやらぬと家が焼けるという。これをゲゴウ祝いという（箱田、小室でも）。 伊勢詣りのお飯屋 お伊勢詣りをするとお山づきの予定の日に留守宅では近くの空地（多く田や畑の一隅）にお飯屋を作る。これは間口六尺位の竹の柱、竹の桁で藁葺の片屋根で、屋根の裏側は地面についている。中に人が入れる。初穀を地面にしき、初俵を一俵中央におく。竹の柄に藁製の軍配様の団扇や、藁製の徳利、半紙の横とじの大福帳などを置く。大福帳には登山銭別をかく。昔は個人毎に作ったが、団体とか講で伊勢詣りする時は共同で大型のお飯屋を作る。さて御詣りをすませて下山すると、このお飯屋で初俵に腰かけて酒を一献くむ。そしてお飯屋に火をつける。燃えあがると各自の家に帰るのである（八崎・八津・谷津、分郷入崎でも）。大正時代まで行なわれた。代参者が帰って来ると、お飯屋の中に入ってタネ俵に腰かけてオミキを吞んでいる間に、他の者がうしろからお飯屋に火をつけるので、タネ俵を担ぎ出す。終わって家に入る。代参者がお飯屋の所に行く前に家に入ったりするとその家は火事になる。またお飯屋からタネ俵を担ぎ出さないと、家に火をつけられると言って忌む。タネ俵というのは、臨時につくる径三十センチメートル位のものである（箱田）。
渋川市誌 (1984年)	渋川市	明治の中ごろまでかなり盛んであった。伊勢参りに出かける時は、お飯屋を作って拝んだ。伊勢神宮に到着する予定日には、お山着きといって各戸で赤飯を炊いてお祭りをした。無事に帰って来ると報告をし、お飯屋は鎮守様に運んで焼いた。その日は下向振舞といって講員や近所の人を呼んでお祝いをした（有馬、渋川でも）。
室田町誌 (1966年)	榛名町	数日前から鎮守の庭に新藁や竹で片屋根のお飯屋を作って鎮守に祈願、身を浄め、お籠りをします。伊勢神宮で太々神楽を奉納する予定日をオヤマツキといい、残った講員は鎮守の杜のお飯屋に祈願します。帰ってきた代参者はお飯屋入りし、棧俵の上に乗ると、直後にお飯屋は火をつけて焼いてしまう。
嬬恋村の民俗 (1973年)	嬬恋村	神社前に藁で小屋をつくる。代参者の数によって一人なら一軒、三人なら三軒の小屋。そこで旅装束を新しくし、古いわらじ等はその小屋に入れた。そして小屋を燃やす。そこまでは伊勢の神様がついて来たが、その煙ののってお帰りになるという。その後神社にお詣りする（田代、芦生田でも）。 諏訪神社境内に70cm位の藁で作ったお飯屋を建て、代参人某と書いたお札を下げる。帰ってくると諏訪神社に参拝して、お飯屋を燃やす（今井、鎌原・袋倉・大前でも）。
勢多郡東村の民俗 (1966年)	みどり市	代表が伊勢参りに出た後、お飯屋（藁と竹で作る）にお参りをする（関守）。
大間々町の民俗 (1977年)	みどり市	三峯講はお飯屋をつくった。伊勢講もお飯屋をつくった。
前橋市城南地区の民俗 (1975年)	前橋市	伊勢講はないが希望で行った。田に六尺まっ角位の藁のお飯屋を作ってタチブルマイ、ゲコウイワイをした。ゲコウイワイは中で一杯飲んでる所を、後から火をつけて燃やす（下大島、小屋原は茅）。昭和初期頃、伊勢参りに行く時はお飯屋を造り、その中に大福帳、藁で酒樽を作り、軍配うちわも備えた。このお飯屋から水杯で出発して行った。出発後毎朝お飯屋に家人はお参りを行った。帰って来るとまず村の神社へ参拝し、お飯屋に入る。近所の者がこのお飯屋に火を放つ。この小屋の竹のはねる音が皇大神宮まで聞えると幸福だといい、大きい音が出るように願った（富田、今井・泉沢・新井でも）。 地元ではお飯屋を造って祝い、帰るとそのお飯屋（藁小屋）に腰をかけてから、火を付けて焼く（下大屋、筑井は菅でつくる、荒口でも）。
大胡町誌 (1976年)	前橋市	神社の境内とか自分の家の田に、お飯屋をつくった、お飯屋は、参宮に行く人の人数だけつくった。お飯屋の中には、俵の模型をつくってかざったり、このめ（木の芽か）をたったり、時計をさげておいたり、ふつうの家のようなかたちにしつらえてあった。お飯屋には家族のものが、毎朝無事を祈りに行った。帰ってくると、本人にお飯屋の中に入ってもらって、お飯屋のうちから火をつけてもやした（河原浜、堀越でも）。
宮城村の民俗 (1981年)	前橋市	伊勢参り 行く前に自宅にお飯屋をこしらえた（三夜沢）。
倉測村の民俗 (1976年)	高崎市	藁のお飯屋を事前につくり、前日には近所の人に集まってもらって赤飯をふるまい水杯をかわした。フクベに水を入れ、印籠を下げて出発した。六十日もかかったという、伊勢につく日にお祝いをした。帰着するまで家族の者は陰膳をすえた。帰着するとお飯屋に行って腰を入れ、後から燃してしまう。それから自宅に入りお祝いする（一区）。

出典（刊行年）	現在の市町村	記事
高崎市東部地区の民俗 (1978年)	高崎市	鎮守様の境内にお飯屋を作ってそこから出発した。家の者が帰って来るまで毎朝鎮守様のお飯屋まで行き、お飯屋の柱の下を水で洗い、伊勢参りに行った人が途中で足がつかれないようにと祈願した（中島）。 青竹と藁でお飯屋をつくった。家族は毎日このお飯屋にお詣りし、また陰膳をすえた。帰ってくると、まずお飯屋の前に来て御神酒を供え、お飯屋を焼き、それから自分の家に入りお祝いがある（元鳥名、榎町・鳥野でもお飯屋）。
新修高崎市史 (2004年)	高崎市	上小塙町では、代参者を出した家では、それぞれ庭にお飯屋を作り、留守中毎日ご飯や水を供えた。代参者が帰ると、お飯屋の前に置いた俵の上に腰掛けるが、そこで子供を抱くとその子が幸福に育つといい、親戚や近所の子供を抱いたものであった。その後、お飯屋に赤飯を供え、拝んだ後、塩を撒いて清め、火を付けて燃やす。お飯屋の灰は踏んではいけないといって、ていねいに集め、田に振り撒いたが、そうすれば稲がよく生育するといった（元鳥名町でも）。
安中市史 (1998年)	安中市	出発する時は近くの田んぼに青竹を柱にして稲藁でお飯屋を作り、オタチブルマイをして出掛けた。伊勢から無事帰って来るとお飯屋に火をつけて燃やしてから家に入った。竹のはねる音で、「無事に帰り着いた」という報告が伊勢神宮に届くのだという（上後閑）。
富岡市史 (1984年)	富岡市	籤引きで代参者を順番に決め、曾木神社に飯宮をつくり、二人ずつで十日間ぐらいかけていつてきた。大正の初期ごろまで行われていた（曾木）。南後箇では講中で四十人程で行った。行くとき川原にお飯屋を作り、拝んで出掛けた（額部、黒岩でも小屋）。
妙義町誌 (1993年)	富岡市	お伊勢参りに歩いて行った頃は、田の端などにお飯屋をつくったという。二人で行くときは二戸、三人で行くときは三戸つくったという（上高田）。
多野藤岡地方誌 (1976年)	上野村	戦後は講をしなくなった。上野村川和では四十二才の厄年を過ぎた人が伊勢神宮に代参し、庭にお飯屋を造って安全を祈り、帰ると燃やした。
藤岡市史 (1995年)	藤岡市	大正時代までは伊勢講があった。代表が伊勢参宮に出かける。出かける家の人が道中の無事を祈るため、鎮守浅間神社境内に、竹の柱を立てて藁をふいたお飯屋を造り、拝んで出かけた。無事に帰って来ると、鎮守のお飯屋を燃やして、下向祝いをした（芝平、金井・大平・上戸塚・下戸塚でも）。
桐生市梅田町の民俗 (1970年)	桐生市	銭別をもらって伊勢参りをする。お飯屋を道の脇に作った。お飯屋に藁で作った人形をあげておいた。伊勢から帰るとお飯屋に腰かけて休む。お飯屋に火をつけて燃やす（鍋足）。
藪塚本町の民俗 (1974年)	太田市	お飯屋を神社（権現様）に建てる。青竹の丸竹で作る。屋根と囲いは青いきれいな藁で作る。紙で作った人形をその中に納め、家族が毎日お参りする。帰ってくるとお飯屋をこわして燃やす。すると、青竹がはねる。その音が伊勢まで聞こえ、今無事に帰ったという報告となる（滝ノ入、山ノ上・中原でも）。 伊勢参りに出掛けたあとは、お飯屋を作り、雛人形を入れ、帰るまで陰膳を供えて拝んだ（寺下、台でも雛人形）。
千代田村の民俗 (1972年)	千代田町	家敷内に設けられた小屋に入り、外から火をつけられ、そこから飛び出し家にはいった。伊勢様が道中の安全を守ってきたが、火をつけられることにより煙に乗って伊勢に帰って行くのだといわれていた。明治時代までつづけられた（鍋谷）。

（原文の引用に際しては、文章の省略や語句の修正を行った）

者が帰るまで家族はお飯屋にお供えをし、家でもその人の食事を用意する陰膳をしたところもある。地区によっては中に人名を書いた札を吊したり、身代わりの人形を置いたりするところもあったという。<sup>⑭</sup>

代参者が無事に伊勢から帰ってくると真つ先にこのお飯屋のところへ行き、中に座って一献の御神酒を飲んでいると後ろから別の講員が火を付けて燃やし、そこから飛び出してはじめて家に帰ることになる。中には履いていた草鞋と一緒に燃やした所もあった。

燃やす理由としては、伊勢の神様が道中一緒にきて安全を守ったので、燃える煙とともに帰って行くのだとか、燃えた竹がはじける音で、代参者が無事に村に帰ったことが伊勢の神様に報告されるのだと言い伝えられている。さらに、お飯屋を焼く煙を浴びると一年中無病息災であるとか、燃えあとの灰を田にまくと稲がよく育つ、代参人が入浴した残り湯を使うと安産である、水難除けになるとの伝承もある。

この事例に注目した櫻井徳太郎は、これらの伊勢講のお飯屋は神社の精進屋のようなものであり、出発前の精進潔斎に使ったものだと考えた。精進潔斎のために籠もった代参者は神聖視され、旅の間はその無事を家族が祈るとともに、帰った後で燃やすのは、こういった御籠り小屋のような祭りのための施設は祭りが終わると破却したり燃やされたりするのと同じである。これを燃やすことで初めて家に帰ることができ、帰着を祝う宴会をしていることから、精進明けの儀礼でもあるとする。<sup>⑮</sup>その際の、道中を送ってきた神が伊勢へ帰るとか、竹がはねる音で伊勢の方に無事に帰った事を知らせるといふ伝承は付加されたものである。

伊勢講のお飯屋は、すでに群馬県では伝承として記録されているだけ

になってしまったが、長野県では最近まで行われていたところがある。

長野市北東部の長沼地域に、伊勢講のお飯屋が残っていた。『善光寺平のまつりと講』の口絵には、津野の八幡神社で両屋根のお飯屋に座った四人の代参者が神酒を飲んでいる写真があり、昭和六十二年（一九八七）の聞き取り調査で次のような伝承を記している。

代参人は朝八時に八幡神社に帰郷し、拝礼をする。総代や区役員などが出迎える。伊勢参りを済ませた代参人を伊勢神宮の神とみなし、葦と藁で作った「お飯屋」と呼ばれる小屋に迎え入れるが、代参人は江戸時代から伝わる慣習通り後向きで小屋に入り、お神酒一杯を飲み、田作り、きんぴらごぼうを食べる。食べ終ると役員が背中側の壁を取り外し、後向きのまま外へ出る。お飯屋は公民館庭に建てられ、この後「連れてきた神」を伊勢神宮へ送り返すためお飯屋を焼いて神事を終え、各戸へお札を配り直会をする。<sup>⑯</sup>

現況を尋ねるために地元へ出掛けたが、伊勢講はこの調査後間もなくして解散したようで、この行事もなくなっていた。ところが、長野市立博物館が、同じ長沼地域の六地藏町の伊勢講ではまだこの行事が続いていることを紹介している。

その記事によると、下向した代参者を迎えるお飯屋は葎ワラで作り、この中に座った代参者がお神酒を受けた後、後ろ向きのまま退出し、その直後にお飯屋は燃やされる。その燃えた煙に乗ってそれまで代参者に付き添っていた神が伊勢に戻ると言われているのだという。<sup>⑰</sup>

伊勢講のお飯屋は、おそらくほかには伝わっていないのではないかと思われるが、代参講の帰着時に燃やすお飯屋の事例を、秋葉講あきはで調査し

ている。次にそれを紹介したい。

### 三 秋葉講のお飯屋

山梨県韭崎市穂坂町宮久保では、静岡県浜松市天竜区春野町の秋葉山へ代参して帰って来ると、秋葉講の祭りが行われる。本来は講に加入している者だけが参加していたが、現在では区の行事とし、区長を中心に運営されている。宮久保区は、東村・上村・中村・新田の五ヶ戸ずつの組に分かれており、毎年交代で祭りの準備に当たる。これは、「小屋掛け当番」と呼ばれるように、藁小屋を造るのが主な仕事である。

祭りは、氏神社の稲荷神社の境内で行われる。特に秋葉社の祠もなく、本殿の前の広場で「秋葉さんのお祭り」、引き続いてこれも講の行事が区の行事になった「お天狗さんのお祭り」が、本殿東側の斜面にまつるお天狗さんの小祠の前で行われる。

秋葉山への代参の翌日に行われる祭りであり、もともと日程は定まっていなかったが、現在は正月二日に代表の三名が自動車で代参し、翌三日に祭りが行われている（調査時は一名欠員）。

当日午前中に、神社の境内に藁小屋が造られる。竹を骨組みにした片屋根の長方形の小屋であり、屋根と三方の壁を藁で覆い、地面にも藁を敷く。二〇〇八年の調査時のお飯屋は、横幅は二二五センチメートル、奥行は一三五センチメートル、前面の高さは一三五センチメートル、後方の高さは一一〇センチメートル、屋根の長さは一四〇センチメートルであった。『山梨県の祭り・行事』（一九九九年）<sup>⑧</sup>の調査時の代参者は五

名だったので横幅が約三メートルあったが、人数が減ったため短くなっている。

午前中には準備が終わり、十三時ごろに再び村人たちが集まってくる。最初に区長の挨拶があつて、代参者たちが藁小屋に正座し、御神酒が振る舞われる。何杯か飲んでいううちに、他の講員が後から藁小屋に火を付け、代参者たちはそれに気がつくの外に飛び出して、燃え尽きるまで小屋を見守る。その後、翌年の代参者の抽籤が行われる。今年の代参者以外の各家からひとりずつ出て籤を引き、不参加者の分も代理で抽籤する。次の代参者が決まると、各家に秋葉社のお札が配られ、約四十分で祭りは終わる（写真2-4）。

その後、社殿横の斜面にあるお天狗さんの石の祠の前に移動する。祠の横で焚き火をし、湯立のために釜で湯が沸かされている。火に当たって人びとが雑談をしている間に、駒ヶ岳の行者が小祠の前に御神酒・塩・米を供えて「甲斐駒嶽式功経」を読む。湯立に移り、行者が笹で湯を撒いて境内に集まった人びとを祓う。すべての儀礼は一時間半ぐらいで終了し、酒やみかんなどが振る舞われる。代参から帰着時に代参者を座らせて藁小屋を燃やすのは、伊勢講のお飯屋と同じ儀礼である。

秋葉山は、古くから修験の山として秋葉大権現（秋葉神社）が祭られていた。江戸時代には火防の神として三尺坊大権現に対する信仰が中部地方を中心にして全国各地に広まっていた。明治初年の神仏分離で秋葉寺が廃され、その後は秋葉山本宮神社、秋葉三尺坊権現を引き継いだ袋井市の可睡斎、のちに秋葉山八合目に再興された秋葉寺の三社寺に分かれている。





写真2～4 葦崎市穂坂町宮久保の秋葉講のお飯屋（2008年）

秋葉寺は奈良時代の開山とされ、修験の山としての古い歴史があったが、庶民に厚く信仰されるようになったのは江戸時代になってからである。『徳川実紀』貞享二年（一六八五）十一月十一日条に、

十一日令せらるゝは、こたび遠州にて秋葉祭と唱へ。村々次第に送りわたし。末々にいたりては人数多群集し。他国までも転送するよし。いとひが事なり。よて厳科に処せられたり。各国鄉村にても。此後あらたに祭祀催事有べからず。さりがたきゆへあらば。寺社奉行へうたへて指揮うくべし。古来よりの神事祭祀は怠慢すべからず。先々のごとく。それもかろく執行すべしとなり。

として、秋葉祭が村から村へ波及し、他国まで広がって群衆が押しかけたので、幕府が禁令を出したことを記しており、このころには、遠江と周辺の国の庶民に秋葉信仰が広がっていたことがうかがえる。やがて、遠州掛川、信州飯田、東海道御油から三河鳳来寺を経由して秋葉山に向かう街道は秋葉街道とよばれて参詣道が整備され、さらに多くの人びとが参詣するようになった。

持ち帰った秋葉山のお札は、火防の神としてまつられた。家の竈には荒神をまつところも多いのに対し、秋葉神は町や村の火災除け（防火）として、とくに城下町や宿場町でまつられた。

写真5は民家の棟の上に祠が設けられているもので、屋根神とよばれる。静岡県から岐阜県にかけて民家の屋根のところに見ることができ、建物の建て替えなどでその数は減っている。秋葉神だけではなく、名古屋市内の屋根神では熱田社、津島社などのお札を一緒にまつところも多い。毎月一日と十五日は月次祭として祠の扉を開け、お供えをし



写真6 湖西市新居町（俵町）の秋葉山常夜燈（2021年）



写真5 名古屋市西区枇杷島の屋根神（2011年）



写真7 浜松市浜北区小松・秋葉神社（2021年）



写真8 諏訪市中洲神宮寺（秋葉講と三峯講のお仮屋）（2021年）

ている。

宿場町では、街道に沿って秋葉山の石燈籠、常夜燈が建てられている。写真6は静岡県湖西市新居町の小松楼まちづくり交流館前にある旧新居宿の常夜燈で、文政八年（一八二五）の銘がある。背後には神棚があり、右から「秋葉神社」「春埜山」<sup>⑧</sup>「津島神社」と三つの祠が納められている。このように、常夜燈のそばには秋葉神社のお札をまつところも多く、なかには愛知県豊川市大木新町通の大樹院前の常夜燈のように、大きなお堂の中になつられるところもある。

写真7は、浜松市浜北区小松の秋葉神社で、秋葉街道沿いに建立されている。文政五年（一八二二）銘の高さ七・三メートルの大鳥居の向こうに見えるのが本殿で、鳥居の右横の建物は龍燈と呼ばれる。内部に常夜燈を納め、周囲を覆堂（鞘堂）で覆ったもので、常夜燈には明和五年（一七六八）の銘がある。秋葉信仰では常夜燈とともに、龍燈も多数建てられているのが特徴である。

秋葉山への信仰は、先に述べたように十七世紀後半の貞享年間あたりから広がったと考えられている。一方、現存する常夜燈の造立年代は宝暦六年（一七五六）以降であり、十八世紀後半から秋葉講が各地で広く組織されていたことがうかがえる。

代参で持ち帰ったお札は、常夜燈のそばや氏神社の境内でまつられた。その多くは木製の祠で、やがて氏神社の末社となったものが見られるが、最初から木製の祠ではなかった可能性がある。

写真8は、長野県諏訪市中洲の諏訪大社上社の神職、大祝の屋敷跡に隣接する春日神社の社殿横にあるお飯屋で、中には秋葉神社のお札がま

つられている。高さは一五〇センチメートル、間口は九〇センチメートル、奥行は一三〇センチメートルの両屋根の建物で、屋根と壁はススキの穂で葺かれている。以前二〇一〇年に調査した際にはそれぞれ。八五、一〇五、八〇センチメートルであったので、造りかえることに大きさが少しずつ異なるようである。

秋葉講のお札をまつるのは、ほとんどが木製の祠になっている中で、古い形態を伝えるものである。

#### 四 津島講のお飯屋

愛知県津島市の津島神社は、江戸時代まで津島牛頭天王社として神仏混淆の神社だった。十二世紀後半には尾張国で広く信仰を集めていたことが知られており、もともとは水の神、防疫の神だったが、のちには様々な願い事をかなえる神と信じられるようになった。

社家や社僧とその子弟や手代たちが御師<sup>おし</sup>として活動し、現在神社に残る最古の檀那帳の「慶長十三年（一六〇八）大吉御檀那帳」には、尾張を中心に信濃・越後・上野・紀伊・伊予・豊後にわたる十六か国に檀那場があったことが記されている<sup>⑨</sup>。

御師の布教活動が盛んに行われた結果、全国各地に津島信仰が広がった。そのため、今でも正月前か、津島祭にあわせて夏の六、七月に津島講の代参者が参宮して神札を受けて帰ったり、郵送での依頼が来ることが多いという。

現在七月下旬に行われる津島祭は、室町時代後期に始まったとされ、



天王川に船を浮かべて神葭<sup>みよし</sup>を流し、それが流れ着いたところに棚を作って七十五日間まつることになっている。その影響で、神社周辺の本曾川流域の集落でも、七月に竹や真菰<sup>まこも</sup>でお飯屋を作って神札を納め、オミヨシサンと呼んでまつっている。

それ以外の地域でも、持ち帰った神札を集落中央の広場などに祭壇を設けてまつる津島祭（天王祭）を行い、その後も木製や石製の祠で引き続いて翌年までまつる。その中には藁や杉葉などを使った古い形態を伝えるところもあり、東は静岡県の伊豆半島から西は滋賀県の湖東地域あたりまで広がっている。それらの様子についてはすでに紹介したので、ここでは長野県（信濃）の事例を紹介して補足したい。

先に述べたように、慶長十三年（一六〇八）の檀那帳には、信濃国に檀那場があったことが記されているが、文化十三、十四年（一八一六、七）には、信濃のほぼ中央部が山本一六郎という御師の檀那場になって



写真9 諏訪市四賀飯島・神明宮内の  
津島神社（2021年）

いた史料が残っている。<sup>24</sup>

飯田市中心部の飯田地区では、各町内に津島講が組織されている。正徳五年（一七一五）に巡礼六部が飯田に来て祇園様を置いていったのがその由来と伝えられており、町によって直接津島神社へ参詣して神札をもらってくるところ、郵送で送ってもらうところと異なるが、七月十四日、十五日に町の集会所や自治会館の前に祠を出して授与された神札を祀り、疫病除けなどを願って祇園祭を行う。その後は、集会所などの屋内に小祠を移し、翌年までまつる。調査報告では、祭りがなくなったところも含め五〇か町で祇園祭が行われている。<sup>25</sup>

写真9は、諏訪市四賀の神明宮の本殿横にあるお飯屋である。中に御幣を納めた小祠をまつり、藁で覆屋を造って四隅に御柱が立てられている。覆屋の高さは一三〇センチメートル、間口は一二〇センチメートル、奥行は一〇センチメートルである。『諏訪四賀村誌』には、「飯島村では、神明宮社殿の東側に、葦で上屋<sup>うわや</sup>を作って須佐男神社（津島神社）を祭り、現在でも、七月十四日に神官を迎えて例祭をおこなっている」とあり、神明社の末社になってもまだ、葦で屋根や壁を葺いていたお飯屋の形態を伝えている。

長野県の北端、新潟県糸魚川市と接する小谷村の黒川では、天王様の祭りが伝えられている。集落の中央の道路沿いに天王岩をまつる場所があり、普段は写真10のように間口一間（約一・八メートル）四方の区画があるだけである。毎年六月三十日の真夜中に集落内にある諏訪神社の宮司が、先端の分かれた三又とよぶ木製の鉾をここに立てて天王様の神霊を招き、その頭へ杉の枝をつける。また四隅には桂、檜、かえで、い



写真10 小谷村黒川・天王様（2021年）

たやの四本の木の枝を立て注連縄を張る。七月十五日の祭りでは、五人の子どもが五色の鉢巻き、襷姿で御神体の三又と木の枝をそれぞれ神社へ運ぶ。三又は本殿に納め、木の枝は拝殿横の桂の木に打ちつけて葉を落とし、落ち方ですの年の作柄を占う。

現在は子どもが少なくなったので、大人が運んでいるとことだったが、木の枝で覆われた神籬ひもぎの姿を伝えている。天王様と呼ばれているが、お

そらく津島信仰が伝わったものと考える。

秋葉信仰は江戸時代の初期から、津島信仰もその前から庶民の間でまつられ、江戸時代に講が組織されて代参が盛んに行われるようになったが、次にもう少し後の段階で信仰が広まった、代参講の事例を見ていきたい。

## 五 山犬をまつるお飯屋

第二節で取り上げた伊勢講のお飯屋の伝承が残る群馬県赤城山麓の地

域では、伊勢講以外にも代参講のお飯屋の記事がある。

『勢多郡 横野村誌』（現在は渋川市）には、三峯講として、

代参人がお山に行っている間に、講員はお飯屋を作る。樽部落では代参人がお山へ着く日に講中が集つてお飯屋を作りかえる。各自竹一本、縄十尋持参し、山から萱を刈つて来る。三原田、持柏木両部落では、下山の当日、午後三時頃講中で竹二本、縄一房、萱一束ずつ持参して作る。上三原田部落は三講あるので輪番で作る。これらの部落でも毎年作り換えられるのはお飯屋だけで、周囲に結えられた垣根は、そのままある上に外側から同じように新しく加えて結びつけていく。そのため、垣根が五重六重になつているのは珍しくない。いつ全部を新しくするか、全然そのままで続けていくか等については、これと云う決めはないらしい。

とあり、同じく『勢多郡 敷島村誌』（渋川市）には、

津久田二区の三峰講。近年は交通が開けたので日帰りの代参者が多い。代参者が帰ってくる日、講員が総出で御飯屋を修理したり、境内の掃除をしておく。御飯屋に御眷属拝借之贖を安置してから代参者宅へ行きお日待をする。お炊上げと称して、二合の米を炊いて全部を御眷属に供えてから代参者の家で、御札を受け会食をして、次回代参者を決定して引継をする。此所の御飯屋は今上神社の参道の中腹左側にあつて、木造杉皮葺の社殿なので年毎に葺替をしない。とある。伊勢講のように代参の間にまつり、帰着後燃やすお飯屋ではなく、代参者たちが出かけている間に新しく造りかえるか修理をして、神社から授与された「御眷属拝借之贖ごけんぞくはいしやくのあだ」をまつるためのお飯屋である。



三峯神社は埼玉県秩父市三峰にある神社で、三峰山と総称される三つの山のうち、妙法が岳にまつられている。秋葉山が標高八六六メートルなのに対し、奥宮がある妙法が岳の頂上は一三三二メートル、主要な社殿も標高一〇〇メートルの位置にある。

伊弉諾尊・伊弉册尊を祭神とし、神のお使い、御眷属<sup>けんぞく</sup>は山犬（狼）とされ、神格化された大口真神（お犬さま）は猪などの獣害を防ぐだけではなく、災難、盗難や火難除けなど様々な災難から守るとされている。

三峯神社では、このお犬さまを借りて帰る信仰がある。江戸南町奉行をつとめた根岸鎮衛が記した『耳囊』（巻之三）「三峰山にて犬をかりる事」に、

且又右三峰権現を信じ俗難・火難除の守護の札を附与する時、犬をかりるといふ事あり。右犬を借る時は盗難・火難に逢ふ事なしとて、都鄙<sup>もつしな</sup>の申習し事なり。或人、「犬をかり候とはいへど札を附与斗也。誠の犬をかし給ふ事もなるべきや。神明の冥感<sup>みょうかん</sup>目にさへぎる事を」頼みければ、

とあるように、盗難・火難除けに犬を借りるのは、本当の犬ではなく、札（護符）を受けて帰るといふ信仰が江戸時代後期には広がっていた。

この火難・盗難除、諸難除の山犬の護符（御眷属拝借之牘）を配るようになったのは、享保五年（一七二〇）から寛保三年（一七四三）まで三峰山に入って住持を務め、神使の山犬を大口真神としてまつた日光法印がはじめたとされている<sup>③</sup>。そして、宝暦四年（一七五四）正月に下総国印旛郡神門村と同郡戸神村からそれぞれの役人連署で、猪鹿除け、盗賊除けのために御犬を御拝借したいという願いが出されたのが、神社

に残る最も古い御拝借を依頼する文書である。続いて、宝暦六年二月にも、伊勢国小倭上村と谷杣村の五人から江戸の取次人を通じて出された願書が神社に残っている<sup>④</sup>。

今でこそ、道路が通じ車で社殿の近くまで行けるが、昔は秩父の山奥まで徒歩で登っていかねばならず、直接神社へ参拝した記事は、『三峯神社日鑑』安永八年（一七七九）七月六日条に、江戸市谷町講中七人が「御神犬老正引替」のために三峰山に参詣したのが古い記録である<sup>⑤</sup>。

そのことから直接三峰山へ参拝する参拝講と、代表者が参拝する代参講が各地で結成されたようだが、赤城山麓の村では伊勢講と同じように代参講が主となっていた。

この拝借して帰ったお犬さまのまつり方については、三峰山側から指示がある。「御眷属拝借心得書」というもので、御眷属を授与する講の人数や初穂料などに続いて、次のような記述がある。

一 御在所へ御帰着被成候は、早速假宮（清浄なる地にて御自分持の山林又は庭中小高き所へ御勧請なされ或は鎮守の境内等へ木材、茅、藁の類にて御造宮）へ御勧請なされ注連縄を張り御酒御饌<sup>みきごせん</sup>（是は洗米にてよろし）を土器<sup>かわらけ</sup>に盛り御献備不潔の者立寄せぬやう御注意なされ、御祭り御信心の誠を被致可き事<sup>いたさるべき</sup>。

初穂料は心得書の発行年代によって異なるため、他の文面も少しずつ異なっているが、内容としてはほぼ同じで、この文章は石倉重継著『三峯山誌』（一九〇六）に載っている明治時代のものから引用した<sup>⑥</sup>。ここには、お犬さまは自分の山林や庭の小高い場所、あるいは鎮守社の境内に木材・茅・藁の類で仮宮を造営して清浄にまつるよう指示されている。

そのため、三峯山のお札はお飯屋でまつられているところが多い。

この三峯講のお飯屋は『勢多郡 敷島村誌』に、津久田二区の写真が載っている。前方は二本柱、後方は地面に接した片屋根で、杉皮で葺かれていた。さらに、周囲は矢来をめぐらせている。敷島村は横野村と合併して赤城村になるが、『勢多郡 横野村誌』の記事にある三原田の八幡宮境内にあったお飯屋の写真が、『群馬県史』に載っている。人の背よりも高い矢来に囲まれた片屋根で、昭和四十四年（一九六九）の撮影になっている。<sup>⑤</sup>

渋川市三原田は農村歌舞伎舞台が残っているところで、二〇〇八年に現地を訪ねて調査をしたが、三原田八幡神社、上三原田八幡神社とも神社の境内と周辺の区画整備事業が行われており、お飯屋は跡形も残っていなかった。上三原田では三峯講そのものが解散しており、三原田では三峯講は残っていたが、代参者が帰った後で食事をするだけになっていて、お飯屋のことを記憶している方を見つけることはできなかった。

ほかにも『北橋村の民俗』に、これらと同じ形をしたお飯屋の写真が載っている。とくに口絵は、三峯講のお飯屋の隣にもうひとつ片屋根のお飯屋が並ぶ写真であるが、どこの講のものかは記されていない。同書では伊勢講のお飯屋も葺製で片屋根とあるので、伊勢講の影響で三峯講などのお飯屋も片屋根になったのかもしれない。<sup>⑦</sup>

三峯講以外にも、『敷島村誌』の津久田には、古峰講のお飯屋もあったことが記されている。栃木県鹿沼市草久の古峯原・古峯神社をまつる講で、同社の祭神日本武尊のお使いは天狗だとされている。

また、埼玉県神川町の城峰神社の祭神は日本武尊で、神の使いは山犬

とされ、三峯神社と同じようにこの山犬のお姿（お札）を持ち帰ると、養蚕、商売繁盛、安産などの御利益があるとされている。

この城峰講も御札をまつるお飯屋が作られたようで、現在は高崎市と合併している『倉賀野町の民俗』には昭和初期のお飯屋の図が載っている。正面は上部が一・二メートル、下部は一・五メートルの台形で御簾が掛けられ、高さは一・三メートル、奥行は約二メートルの片屋根の建物であったことがわかり、群馬県内の代参講のお飯屋の形態は、共通していたことがわかる。<sup>⑧</sup>

群馬県では、このような片屋根の形式を伝える三峯講のお飯屋は、現在ほとんど残っていない。筆者が唯一調査ができたのは、埼玉県上里町七本木古新田のお飯屋である（二〇一〇年調査）。西行きの古新田バス停の所にお飯屋があった。片屋根で鉄パイプの骨組みをしており、高さ約一・二メートル、幅約二メートル、奥行約二・一メートルで、屋根の前方に丸い軒を作り、軒の上に竹矢来を立てていた。内部の中央奥に棚を吊り、お札を納める。雨漏りでお札が痛むのを避けるため、金属製の菓子箱にお札を納めて棚の上に置き、その下の地面には蠟燭立てなどを置いている（写真11・13）。高さは低いが、群馬県内の写真に写されたお飯屋の形とよく似ている。

もとは、茅葺きだったが、稲藁を使うようになっていて、葺束五束で屋根を造るという。柱ももとは竹だったが、鉄パイプに変えたという。講の世話役である当時の講元の話によると、古新田講は明治三十八年（一九〇五）五月に結成した講で、もとは二十軒で組織されたが、調査時には十九軒になっており、毎年四月下旬から五月上旬に四人一組で三峯山



写真11～13 上里町七本木古新田の三峯講のお飯屋（2010年）

へ代参する。昔は徒歩で三峰山に登って宿坊で一泊し、のちには自転車とロープウェイとなり、調査時は自動車で日帰りになっていた。

このような古い形態を残していた古新田の三峯講のお飯屋だが、二〇一二年に訪ねた際にはまだ残っていたが、その後造られなくなっており、別の場所で常設の祠にまつられているようである。

ほかにも、長瀬町長瀬町、宝登山の麓にある宝登山神社も山犬をまつる神社で、御眷属のお札を受取って帰る代参講がある。群馬県の『太田市史』には、

代参のものがでかけたあとは、オカリヤをクルワごとにつくって（わらで小屋をつくり、前をスギの葉で飾る）、代参のものが帰ってくると、赤飯をたいてそこへまつりこむ。お札を、一軒三枚ずつく

ばる（北金井）。

とあり、藁のお飯屋の前側に竹矢来と杉葉がある藁製のお飯屋の写真が載っている<sup>⑤</sup>。

『新編埼玉県史』にも、皆野町金沢にあった宝登山講のお飯屋の写真が載っている。正面が馬蹄形で窓のところに御簾が懸かっている<sup>⑥</sup>。この写真が撮影された正法寺を二〇〇九年に訪ねたところ、宝登山神社の御眷属の札をまつる祠は、石製にかわっていた（写真14）。

山犬をまつるお飯屋について補足すると、岐阜県恵那市串原の中山神社の中山講の信仰がある。中山神社は、大和国吉野郡の金峰神社から勧請されたと伝えられる神社で、狐や狸などの憑きものに効果があるといわれるお犬様を眷属としてまつっている。長野県、岐阜県、愛知県を流れる矢作川の流域を中心に信仰されているが、この神社の特徴は、陶器





写真15 豊川市足山田町・中山神社  
(2021年)



写真14 皆野町金沢・正法寺境内の宝登山講の  
お飯屋 (2009年)

製の犬の人形を配っている。中山講では柱の上に小さな祠を作り付け、授与された人形をその中に安置してまつている。<sup>④</sup>

愛知県豊川市足山田町の中山神社は、陶製ではなくお犬様の石像をまつっており、檜葉で屋根を作っている。現在の柱は木ではなく、金属になっており、毎年秋に屋根を葺き替えるようである(写真15)。

## 六 長野県の三峯講

群馬県や埼玉県、三峯講のお飯屋は少なくなっているが、長野県ではまだ古い形態の三峯講のお飯屋が残っており、次にそれを見ていきたい。

『松本平の石神石仏考』には、朝日村西洗馬原新田のお飯屋の写真が載っている。四本の柱の上に棚を載せてお札をまつり、前面に御簾を懸けて周囲を杉葉で覆ったものだが、現在はトタン板のものにかわっている。<sup>⑤</sup>

『松本市史』に、

ムラの三峯講は、杉の葉でかこむ祠あるいはなにもかこわぬ祠を「三峯のお飯屋」とよんで、これにムラを守る三峯神社の御札を祭り、仲間で祈願しているところがみられる。今井の上新田の町会が、道祖神場の四本柱の上に両流れ造りの大きな祠をもうけて三峯神社の御札を祭り、三峯講の祭りをしている。<sup>⑥</sup>

と記されている上新田のお飯屋も、写真16のようにトタン板の屋根の常設のものにかわっており、扉の格子越しに内部をのぞくと三峯神社のお札が何枚も納められている。

これらは杉葉だったが、藁のところもある。白馬村青鬼集落の三峯社



写真16 松本市今井・上新田の道祖神場お飯屋（2016年）

は、集落を見下ろ

す裏山にある青鬼神社の近くにまつ

られている。六月十一日に藁で「三

峯さま」の社を造り、三峰山から受

けてきたお札をまつて祈禱するとい

う。現地を訪ねたが、青鬼神社か

らさらに東側の山中に入るようで、

現状は確認はできていない。

三峯神社の昭和十五年（一九四

〇）の府県別の調査では、長野県の講社数は一四一〇で講員数は四六三二六人と一番多く、

以下埼玉の九一四社（三〇四二〇人）、千葉、茨城と続くのに対し、講員全員で三峯神社へ参拝する参拝講社は東京、千葉、埼玉と続き、長野は

昭和十三年（一九三八）に四、昭和三十三年（一九五八）でも七と数が少なく、長野県の講社はほとんどが参拝講ではなく、代参講であること

がわかる。<sup>⑤</sup>

代参者が拝借したお犬様のお札は持ち帰って、村の入口や辻、氏神社の境内でまつられた。そのため、その当時は一四〇〇をこえるお飯屋が

長野県内に存在したはずだが、戦後は次第に講が解散したり、代参が行われなくなつてその数が減つていったのと、竹で骨組みを作つて藁・ス

スキ（茅）・杉葉などの植物で屋根や壁を葺く形態は、材料の入手や技術伝承の理由で木製や石製の常設の祠にかわつていく。今でも地区の中央

の辻にトタン屋根の祠を見ることができ、写真8の神宮寺の秋葉講のお飯屋の左側に見える木の祠は三峯講のお札をまつている。

写真にはないが、木製の祠になつても、松本市南小松の集落の東西入口に立つものや、松本市島立の神明社境内のものは左右の壁面に杉葉を

括りつけており、かつての杉葉で覆われた姿を伝えている。

表2は、長野県内の調査で見て廻つた古い形態を残す三峯講のお飯屋をまとめてみた。まだ県内に現存するもののほんの一部だと思われるが、

代参講のお飯屋に関心を持っていたために写真とともに紹介したい（写真17～33）。調査のしやすさの関係もあつて、茅野市から松本市あ

りの事例が多くなつていく。

この中で群馬県に見られた片屋根の形態を残すのは伊那市美簗下川手御社宮司社境内のもの（写真18）だけだが、これも傾斜地に建っている

ため背後の壁がないだけで、側面の壁があるので群馬県のものとは異なるのかもしれない。

あとの多くは神社の社殿を真似た屋形になつていくものが多く、棚があつてその上にお札をまつるものと、地面に接しているもの（床下0セ



ンチと表記)がある。後者の場合には、別の祠の中にお札を納めるものが多い。

松本市内には、柱の上に棚を載せ、周囲を杉葉で覆っているものがある。杉葉の周囲に注連を張っているため、お札は見えない。ボールのような球体ではなくキノコの傘の形の方が近いため、表2には傘状と表記した。入山辺中村は石柱、下岡田の二社は鉄製の一本柱の上に祠を載せているが、大村と梓川のように四本の柱の上に載っているのが古い形だと思われる。

お飯屋が、地区の公民館の付近や道祖神がある辻にまつられるのは、集落の中心部に位置するからだ。集落を見下ろす山の中にまつられる所もある。鹿教湯温泉は集落を見下ろす月見亭とよばれる展望台から稲荷神社へ向かう途中にあり、藁葺きの古い形態を伝えている(写真23)。茅野市宮川でも、坂室公園の屋根の上にまつられている。

小谷村塩坂は、国道一四八号線の塩坂トンネル入口付近にある集落だが、この七戸がまつる三峯様のお飯屋は、集落背後の山中にある。新潟県糸魚川市方面に通じる千国街道の城の越とよばれる峠で、街道から北側の高台に上がると三社のお飯屋が並んでいる(写真33)。いずれも円錐形で二七五センチメートルと背が高く、下部に窓が開いていて中央の社の中にお札がまつられている。全体は藁葺きだが、窓の所だけ杉葉が使われている。

このようなお飯屋は小谷村の特徴のようで、『小谷民俗誌』に、

本社は秩父三峯山の三峯神社で、ここから毎年二月頃其年の火難盗難諸災をよけてもらいお札を受け又部類眷属をお借りしてくるの

が例である。お札は三通りあって、このお札が届くと新しくお納めする小屋を造るのであるが、大いには萱で掘立て小屋の様にし入口を四五糎角位開けて置き、お札は平たい木箱に納めて小屋の中に祀る。丁寧に祀る部落ではお札毎に三棟の小屋とするが、普通は一棟の小屋に納める所が多い。深原では三棟造って周囲を竹垣を囲らし、縄を張る丁寧な祀り方をしている<sup>⑤</sup>。

とあり、『小谷村誌』には、「深原・李平では字宮諏訪神社の境内に祀っているが、御神体を安置しておく社殿を藁で作つてあるのが特徴である。(中略)三峯社の社殿は三社作りそれぞれサンダワラに小豆粥を供えることになっている。島・塩坂・来馬でも茅で同様の社殿を作りお祀りしている」として、字宮諏訪神社の三社が並ぶお飯屋の写真を載せている<sup>⑥</sup>。

同村黒川でも三峯社がまつられている。現在は諏訪神社の社殿の右背後に、二〇一一年大きな木製の祠が新しく建てられている。以前は神社の左手の山中にあったようで、『小谷の神社・仏閣』に写真が載っている<sup>⑦</sup>。円錐形の一社だけが、正面は開口してお札を拝めるようになっている。間口と奥行は一・二間とあるので底面の直径は約二一八センチメートルと大きいものだったようである。高さの記述はないが、二メートル近い積雪があるようなので、積雪時にも位置がわかるように、そのぐらゐの高さがあったのかもしれない。

現在見ることができる三峯講のお飯屋が、隣接する地区で同じような形態になっているのは当然なことだろうが、調査数が少なすぎるため、形態による分布圏を推定することは非常にむずかしい。ここでは現状を紹介するのにとどめたい。

表2 長野県内の三峯講のお仮屋（古い形態を残すもの）

地名	神社名・場所	屋根の形	高さ	幅 (間口)	奥行	床下	御簾	材質	位置、その他
伊那市小沢	中小沢諏訪神社	平入り 両屋根	80	110	100	0	○	杉葉	本殿の左側、隣に御嶽神社。 蛭玉神社の祠。
伊那市美篁	下川手御社宮司社	平入り 片屋根	90	123	130	0	○	茅	社殿の背後の斜面、前方に2本の柱。
辰野町大字辰野 下辰野	法雲寺門前	平入り 両屋根	120	126	110	0	○	茅	四方の壁は御簾を懸ける。
原村柳沢	御手洗神社境内	平入り 片屋根	70	80	70	0		茅	内部にお札を納めた祠と鳥居。 周囲を茅で覆う。調査時は雪の重みで壊れていたため、推定の寸法。
茅野市宮川 坂室	坂室公園	平入り 片屋根	110	40	90	0		茅	宮川と弓場川の合流地付近、坂室橋北東の尾根上。内部に石の祠（高さ60、30×30、お札をまつる）、茅の覆い屋。
茅野市高部	神長官守矢史料館の南西	平入り 両屋根	150	60	60	70	○	茅	墓地の南側
上田市 鹿教湯温泉	月見堂の南側	平入り 両屋根	165	100	75	60		藁	藁で平入りの祠。お札（鹿教湯温泉講社）
塩尻市片丘	南熊井諏訪神社	平入り 片屋根	130 と 100	65	68	65	○	杉葉	2010年調査。社務所の背後に2社。 2016年調査。トタン板の屋根と柱、1社だけに。
松本市入山辺 中村	中村公民館前の辻	傘状	135	70	70	70		杉葉	石柱の上に祠、周囲を杉葉で覆い、注連を巡らせる。御嶽山大権現の石碑。
松本市岡田 下岡田	道祖神の石碑がある辻	傘状	270	130	130	140		杉葉	2016年調査。鉄製の柱の上に祠、周囲を杉葉で覆い、注連を巡らせる。道祖神の石碑の横。 →2021年調査では撤去されていた。
松本市岡田 下岡田塩倉	塩倉池の北方、 青面金剛立像の横	傘状	170	110	110	80		杉葉	鉄製の柱の上に祠、周囲を杉葉で覆う。
松本市大村	大宮神社	傘状	150	80	70	100		杉葉	鳥居の右奥、4本の柱の上に棚、全体が杉葉で覆い注連を張る。内部のお札は見えず。
松本市島立永田	下新駅南東の 道沿い	妻入り 片屋根	140	80	70	70	○	杉葉	屋根を杉葉で覆う。
松本市島立北栗	御乳神社	妻入り 両屋根	155	65	50	80	○	杉葉	本殿右横 柱と壁は木製、屋根だけ杉葉で葺く。
松本市梓川	丸田公民館の西	傘状	160	90	90	80		杉葉	4本柱、柱間50センチ。杉葉で覆い、注連を張る。
松本市上波田	地区の入口	妻入り 両屋根	200	70	90	120	○	杉葉	2016年調査。屋根は杉葉。内部に四角い箱（高さ30、幅30、奥行15センチ）に御札。前に「三峰神社 盗難除・火防・諸災除」の貼紙。『波田町誌 自然民俗編』（1983年）に記述。
小谷村塩坂	千石街道・城の越 付近の高台	円錐形	275	左右の社は100 中央の社は95		0		藁・杉葉	3社、窓（35×40）、中央にお札。 『小谷村誌』には、宇宮諏訪神社の三峯社も藁製の3社だった写真を載せる。

(寸法の単位はセンチメートル)



写真18 伊那市美鷲下川手・御社宮司社（2021年）



写真17 伊那市小沢・中小沢諏訪神社（2016年）



写真20 原村柳沢・御手洗神社（2016年）



写真19 辰野町辰野・法雲寺門前（2021年）



写真22 茅野市高部（2010年）



写真21 茅野市宮川坂室（2021年）

写真17～33  
長野県内の三峯講のお仮屋





写真24 塩尻市片岡・南熊井諏訪神社（2010年）



写真23 上田市鹿教湯温泉（2017年）



写真26 松本市岡田下岡田（2017年）



写真25 松本市入山辺中村（2021年）



写真28 松本市大村・大宮神社（2016年）



写真27 松本市岡田下岡田塩倉（2021年）



写真30 松本市島立北栗・御乳神社  
(2016年)



写真29 松本市島立永田 (2021年)



写真32 松本市上波田 (2016年)



写真31 松本市梓川 (2021年)



写真33 小谷村塩坂・三峯様 (2021年)



しかし、ここ十年ほどにわたって長野県の三峯講のお飯屋を調査してきたが、この間にも変化がある。塩尻市片丘の南熊井諏訪神社の境内にあるお飯屋は、二〇一〇年には二社まつられて杉葉で覆われていたが、二〇一六年には一社に減ってトタン屋根にかわっていた。松本市の下岡田のお飯屋も二〇一七年に調査をしたが、昨年訪ねると周囲は宅地化が進んでお飯屋はなくなっており、道祖神の石碑が残るだけである。

## 七 諏訪信仰のお飯屋

三峯講のお飯屋が、長野県で多数残っているのは、長野県内の講社の数が多かったことや材料となる茅や竹、杉葉などの材料が手に入りやすいことにもよるが、もともと祭りの際にお飯屋をつくる素地がこの地域にあったことを考慮しなければならない。それは諏訪信仰の影響である。諏訪大社は諏訪湖をはさんで上社（諏訪市）と下社（諏訪郡下諏訪町）に分かれているが、両社の祭祀は共通したものが多く、旧七月二十七日に御射山祭が行われる。

この祭りには、鎌倉の武士たちが参加して、狩猟によって武術を競い、捕らえた獲物を諏訪神に捧げたと伝えられ、その際には、神をまつる四棟の神殿や、大祝と随行の神官、参加した武士の宿舎などが建てられた。片屋根の建物で、屋根と壁が丈の長いススキや菅の穂で葺かれたことから穂屋とよばれたため、この祭りは穂屋祭ともよんでいる。

正和元年（一一三二）に完成した『玉葉和歌集』（巻一四・雑歌一）に、「尾花ふく ほやのめくりの一村に しはし里ある 秋のみさやま」とい

う下社の大祝・金刺盛久の和歌が載っており、穂屋は鎌倉時代にまでさかのぼることがわかる。

現在諏訪大社では、御射山祭は八月二十七日に、数えの二歳児の成長を祈る祭りとなっている。下社の穂屋はなくなっているが、上社は御射山神社（富士見町）に残っている。三間・二間の両流れの屋根と柱だけの建物で、祭りが近づくと長さ二メートル余りのススキを並べて壁をつくり、宵宮の夜は神職が泊まる。穂屋は一棟だけになっているが、『諏訪の年中行事』（一九四九年）では、「二十四日に穂の出た青薄で屋根を葺いて穂屋という飯屋十餘宇を造営する」とあるので、かつては多くの穂屋が境内に並んでいたようである。

この祭りにあわせて、御射山神社周辺の集落の神社でも穂屋を造っていたが、壁全面をススキで覆うところは少なくなっており、柱にススキの穂を縛り付けるだけのところも多い。

諏訪大社から離れた地域でも、新暦の八月、もしくは九月に御射山祭を行う神社は多い。箕輪町三日町にある御射山三社では、九月二十六日に箕輪南宮神社から御射山御旅所に神輿の渡御があり、掘立て小屋に青萱を葺いた穂屋を三棟建て、三日間神職たちが籠もったという<sup>⑧</sup>。現在は常設の社殿が建っているが、一番奥にある奥殿の窓には格子ごとにススキの束が括りつけられて、かつての穂屋の様子を伝えている（写真34）。高森町下市田の萩山神社の背後にある台地の上、南信濃農業試験場の南東に森があり、その中に三尺四方で丸太の柱組、萩の壁、ススキの穂で屋根を葺いた小さな祠が残る（写真35）、九月二十八日が御射山祭で、それにあわせて毎年造り直される。



写真34 箕輪町・御射山三社神社御旅所（2009年）



写真35 高森町・御射山社（2009年）

ほかにも長野県内や周辺の都県で諏訪信仰の影響を受けた穂屋が残っている<sup>⑤</sup>。このような、祭りの際にお飯屋をつくりかえてきた民俗が古くから伝わっており、それが代参講のお飯屋に影響を与えたのではないだろうか。

代参講のお飯屋は、群馬県の伊勢講のように、代参者が籠もって精進潔斎を行った精進屋（お籠もり小屋）の機能を持っていた大型のものと、三峯講などの代参講で持ち帰った神札や護符をまつるものがあつた。前者の大型のお飯屋は、徒歩で参詣していた時代のものなので、交通の便がよくなって鉄道や自動車で行くことができるようになると、精進潔

斎も必要がなくなっていく、次第に造られなくなっていく。

さらに、わざわざ代表を送り出す代参でなくとも個人で参拝することができるようになったことが、代参講を維持できなくなる要因となる。また、代参講が続いているところでも、お飯屋を毎年造りかえるのは手間になるし、材料を集めてお飯屋を造る技術伝承の問題もあつて、次第に常設の祠にかわっていく。

神社建築において、やはりから宮へ、仮設のお飯屋から常設の社殿へかわっていったことはよく言われるが、その変化の様子を伝える資料のひとつが代参講のお飯屋である。

## 註

- ① 拙稿「津島信仰のお飯屋」(『関西大学博物館紀要』一五号、二〇〇九年)。
- ② 『安堵町史 史料編下巻』安堵町、一九九一年。
- ③ 『加東郡誌』四九八頁、加東郡教育会、一九二三年。
- ④ 『美濃郡誌』一九二三年初版(一一三七頁 名著出版、一九七五年復刻)。
- ⑤ 『新修加東郡誌』一〇九二―三頁、加東郡教育委員会、一九七四年。
- ⑥ 『巨勢誌』一九〇頁、兵庫県加東郡社町東古瀬、一九七八年。
- ⑦ 『三田市史 第九巻 民俗編』六〇二―六頁、三田市、二〇〇四年。
- ⑧ 久下隆史著『村落祭祀と芸能』九三頁、名著出版、一九八九年。
- ⑨ 『大阪府の民俗資料 大阪府文化財調査報告書 第二〇輯』、三九頁、一九六八年、大阪府教育委員会。なお、口絵の図版七には、床の間にまつられた御幣を納め鳥居の前に立てた小さなお飯屋の写真がある。キャプショ
- ⑩ 『能勢町史 第五巻(資料編)』二八四頁、能勢町、一九八五年。
- ⑪ 原田敏明「オハケ奉斎の形式と変遷」一九四三年初出(同著『村の祭り』と聖なるもの』中央公論社、一九八〇年)。
- ⑫ 井上頼壽著『伊勢信仰と民俗』三一頁、神宮司庁、一九五五年。
- ⑬ 北橋村誌編纂委員会編『北橋村誌』北橋村、九七七頁、一九七五年。
- ⑭ 藪塚本町滝ノ入の紙人形の事例だが、長野県の『大町市史 第五巻 民俗 観光』(四二六頁、大町市、一九八四年)に伊勢若様とよばれた二尺の藪人形を身代わりとしてまつり、帰着後お飯屋と一緒に燃やしたという。
- ⑮ 櫻井徳太郎著『民間信仰の研究 上 櫻井徳太郎著作集第三巻』第三編・第四章「田屋神明社の成立」(吉川弘文館、一九七八年)。同著『講集 団の研究 櫻井徳太郎著作集第一巻』第二編・第一章「参拝講・代参講」(吉川弘文館、一九八八年)。
- ⑯ 『善光寺平のまつりと講』口絵と一五頁、郷土を知る会、一九九八年。
- ⑰ 「新収集資料紹介―三峰講道具―」『博物館だより』九九号、長野市立博物館、二〇一六年。
- ⑱ 『山梨県の祭り・行事』一四一―三頁、山梨県教育委員会、一九九九年。
- ⑲ 『御定書寛保集成』巻二 祭祀之部に、禁令の原文がある(翻刻本 一二四五、岩波書店、一九三四年)。
- ⑳ 春壁山<sup>はるのきんざん</sup>大光寺は、浜松市天竜区春野町にある神仏混淆の寺院で、眷属は「お犬様」(狼)である。
- ㉑ 坪井俊三「遠州における秋葉信仰の展開」、遠山佳治「秋葉山常夜燈から見た秋葉街道(中野東禅・吉田俊英編『民衆宗教史叢書 第三一巻 秋葉信仰』雄山閣出版、一九九八年)。
- ㉒ 伊藤晃雄「津島神社御師の活動」『神道及び神道史』一一号、一九六九年。
- ㉓ 註①参照。
- ㉔ 小島廣次「津島とお天王さま」(『海と列島文化 第八巻 伊勢と熊野の海』小学館、一九九二年)。
- ㉕ 『飯田市地域史研究事業・民俗報告書 6 飯田・上飯田の民俗Ⅰ』(『祇園祭』(三五五―七頁、二〇一三年、飯田市美術博物館)。
- ㉖ 『諏訪四賀村誌』二七八頁、四賀村誌刊行会、一九八五年。
- ㉗ 『小谷民俗誌』三〇〇―一頁、小谷村教育委員会、一九七九年。なお、『小谷の神社・仏閣』調査報告書 一五頁(小谷村教育委員会、二〇〇七年)に、天王様に木の枝をさした様子の写真がある。
- ㉘ 『勢多郡 横野村誌』一一七六頁、横野村誌編纂委員会、一九五六年。
- ㉙ 『勢多郡 敷島村誌』七三五頁、敷島村誌編纂委員会、一九五九年。
- ㉚ 根岸鎮衛著『耳囊』卷之三「三峰山にて犬をかりる事」(文化十一・一八

一四年までの記事。岩波文庫、一九九一年。

- ③① 『三峯山観音院記録下書』(『三峯神社史料集』第一卷、三峯神社社務所、一九八四年)。

- ③② 『三峯神社文書』六八〇～六八二(『三峯神社史料集』第七卷、三峯神社社務所、一九九八年)。

- ③③ 『三峯神社日鑑』第一卷、一〇頁、三峯神社社務所、二〇〇〇年。

- ③④ 石倉重継著『三峯山誌』(關勝閣書房、一九〇六年、国立国会図書館デジタルコレクション)。

- ③⑤ 『群馬県史 資料編26 民俗2』二六六頁、群馬県、一九八一年。

- ③⑥ 『北橘村の民俗』口絵と八二頁、群馬県教育委員会、一九六八年。

ただし、片屋根の形態のお飯屋は、大きさは高さ五〇センチメートルぐらいでもっと小さなものだが、この地域の民家でまつられている屋敷神(稲荷神としてまつられることが多い)とも共通している。

- ③⑧ 『倉賀野町の民俗』一九一頁、高崎市、一九九九年。

- ③⑨ 『太田市史 通史編、民俗(下巻)』二〇五頁、太田市、一九八五年。

- ④① 『新編埼玉県史 別編2 (民俗2)』九五頁、埼玉県、一九八六年。

- ④② 『串原村誌』四八一～二頁、串原村役場、一九六八年。

- ④③ 三村邦雄著『松本平の石神石仏考』八六頁、柳沢書苑、一九七八年。

- ④④ 『松本市史 第三卷 民俗編』五三七頁、松本市、一九九七年。

- ④⑤ 林鎮代「鬼のいる里いらない里 白馬村青鬼」(『関西国際大学研究紀要』第一四号、二〇一三年)。

- ④⑥ 三峯神社誌編纂室編『三峰山』四六頁、三峯神社社務所、一九六四年。

- ④⑦ 『小谷民俗誌』一八〇頁、註②参照。

- ④⑧ 『小谷村誌 社会編』七三三頁、小谷村誌刊行委員会、一九九三年。

- ④⑨ 『小谷の神社・仏閣・調査報告書』一六頁、註②参照。

- ④⑩ 諏訪教育会編『諏訪の年中行事』七月二十七日、蓼科書房、一九四九年。

- ⑤① 『箕輪町誌 歴史編』四四四～六頁、箕輪町誌編纂刊行委員会、一九八六年。

- ⑤② 長野県小海町の松原諏方神社、東京都青梅市の虎柏神社の事例は、拙稿「子どもが籠る祭りのお飯屋」(『関西大学博物館紀要』一九号、二〇一三年)で紹介している。

#### 【参考文献】 註に引用した文献を除く。

- 『群馬県史 資料編25』27 民俗1～3 群馬県、一九八〇～八四年

- 『群馬県史 通史6 近世3』一九九二年

- 『新編埼玉県史 別編1 民俗1』埼玉県、一九八六年

- 『埼玉県立博物館展示解説 民俗』埼玉県立博物館、一九八三年

- 『蕨崎市史 下巻』蕨崎市誌編集委員会、一九七九年

- 『恵那郡史』一九二六年初版(恵那郡教育会、一九八二年再刊)

- 『恵那市史 通史編 第三卷(2)』恵那市、一九九一年

- 『春野町史 通史編 上巻』春野町、一九九七年

- 『長野県史 民俗編 第一卷2 第二卷2 第三卷2 第四卷2』(長野県史刊行会、一九八五～八九年)

- 『企画展 尾張の天王信仰』名古屋市博物館、一九九九年

- 下平武『三峯様のお飯屋』(『西郊民俗』二五二号、二〇一〇年)

- 下平武『三峯様のかたち』(『長野県民俗の会会報』四三三号、二〇二〇年)

- 西村敏也著『武州三峰山の歴史民俗学的研究』岩田書院、二〇〇九年

- 松下孜「天王信仰と津島御師の活動」(『愛知県史研究』一四、二〇一〇年)

宮田登「代参講の地域性」(同著『山と里の信仰史』一九九三年、吉川弘文館)

横山晴夫「三峯信仰とその展開」(五来重編『修験道の美術・芸能・文学(Ⅰ)』名著出版、一九八〇年)

横山晴夫「三峯信仰の展開」(『山岳修験』二四号、一九九九年)

【付記】本稿の一部は、二〇二二年度関西大学学術研究員研究費によって行った。